



ぐずついた肌寒い天候が続いている。あのうだるような暑さがうそみたいだ。日が沈むと鈴虫の声が聞こえる。初秋だ、「うろこ雲」が現われるころ。

うろこ雲は1万呎程度の上層に現われる氷の結晶でできた「巻積雲」の別称で、「いわし雲」や「さば雲」などがある。空一面に広がることもある。さば雲は万国共通、英語でmackerel skyであるが、条件さえ整えばどこでも見られる雲だ。写真は飛行機から眺めたうろこ雲だが、地上から見上げてこんな具合で、非常に薄い。

2015.9.6



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

うろこ雲とみそ汁

冗談ではなく、うろこ雲は、みそ汁と大いに関係がある。

おわんに注がれた熱いみそ汁の表面をしばし眺めていると、いくつもの同じような形に分かれて、みそが下から次々と湧き上がってくるのではないだろうか。一方、境目はやや透明で、みそが潜り込んでいる。これは、うろこ雲の成因と同じである。

層状の流体は、上面が冷やされ、下面が暖められると対流が起こり、全体が規則的な形の細胞に分かれるが、分かれ方は流体の種類、厚さ、上・下面の温度差に依存する。うろこ雲は上面が放射で冷やされ、下面は地面からの放射で暖かいので生まれる。しかしながら、みそ汁がやがて冷えてしまうように、うろこ雲も一般に長続きはしない。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



撮影・海老沢次雄

曇天で、傘も手放せない天候がこうも続くと、気が重い。コラムにぴったりの写真が浮かばないから。そこで、傘から転じて「天空の傘」の話をしたい。

写真のような空をご覧になったことあるだろうか。この秋の長雨が過ぎれば現われるかもしれない。太陽の周りがある、まん丸で馬鹿でかい虹のような輪は、気象学では「暈(うん、かさ)」あるいは「ハロー(halo)」と呼ばれる。日傘という俗称がピッタリだ。

2015.9.13



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

天空の傘

ハローは、上空1万呎程度の巻層雲を構成している微細な氷粒がガラスのプリズムのような役割を果たして生まれる光学的現象で、虹と同じ仕組みである。太陽光が氷粒に入り込むとき、表面で屈折が起こり、反射して出てくるときに再び表面で屈折する。屈折・反射の度合いで色の違いが生まれ、内側が赤で外側はぼんやりした紫になる。虹の場合は雨粒だが、ハローは氷粒である。

ハローの視半径は22度だから直径は45度に達する。まさに「天空の傘」のように空を覆う。低気圧の東側上空に広がる巻層雲に伴って現われやすいから、ハローが望めたら天気は下り坂で「雨傘」も必要になる。なお、ハローは低気圧と関係なく現われることもある。巻層雲が厚いと見られない。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)